

手話通訳士 深海 久美子さんに聞く

聞き手 山岡 三子 ●フリーアナウンサー・名古屋短期大学客員教授

山岡 本日も迎えるゲストは、手話通訳士として、長年ご活躍されている深海久美子さんです。

高校生のころに手話を学び始め、当時の最年少で手話の指導資格を取得。大学卒業後には、神奈川県ろうあ協会（現・神奈川県聴覚障害者協会）専従職員、茅ヶ崎市福祉事務所設置手話通訳を経て、平成二年からNHK「手話ニュース」キャスターとしてご活躍されている、日本の手話通訳士のパイオニア的な存在でいらっしゃいます。

関心がなかった福祉へのきっかけはお弁当と記念品

山岡 まずは、手話を始められたきっかけからお教えいただけますでしょうか。

深海 手話との最初の出会いは高校二年生のときで、本当に偶然のものでした。当時の私は、高校で剣道同好会を立ち上げるほどの剣道好きで、毎日竹刀を振っているタイプでした。周囲に障害者や高齢者がいませんでしたから、実のところ、福祉には全く関心がなかったんです。

でもあるとき、青少年赤十字奉仕団に入

っていた友人から「神奈川県身体障害者陸上大会にボランティアとして参加してほしい」と頼まれたのです。その大会では、友人が障害者をサポートすることになっていたので、急に都合が悪くなってしまうということでした。しかし、あまりにも唐突な話でしたし、私は福祉のことをよく知らなかったので、一度はお断りしたんです。

しかし、再度電話でお願いをされて……。「参加すると交通費とお弁当、そして記念品がもらえるのよ」と言われて、「じゃあ行くわ」と答えたのです。みごとに物につられてしまったわけです（笑）。

山岡 今振り返ると、それが人生のターニングポイントになったわけですね。

深海 ええ、そういうことになりますね。その大会では、聴覚障害者をサポートする役割を得て、そこで初めて手話を体験することになりました。

ある聴覚障害者が、自分の名札を指さしながら、手話を始めたので、「これは名前を表現されているんだ」ということは何と



深海久美子さん（右）と山岡三子さん（2014年3月3日 渋谷東武ホテルにて）

なくわかったのですが、次の瞬間、とても困ったことが起きました。私にも自己紹介するように求められたのです。

初めての手話は自分の名前

深海 紙やペンもないし、手話の「いろいろ」も知らない。どのようにコミュニケーションをとったらいいのかわからずに困惑していると、その方が地面を指さして、「そこに書いてみて」とジェスチャーで促され、「西村」（旧姓）と自分の名前を書く、その方はゆつくりと、手話で表現してくださいました。

お日様が沈んでいく仕草、これが「西」。そして鎌をもって畑を耕す身振り、これが「村」。それが初めて手話に触れた瞬間です。「文字をこんなふうに手で表すことができますのか」と、思わず感動してしまいました。それで手話に一気に恋してしまい、その後の高校生活は手話一辺倒でした。

山岡 せっかく剣道同好会を立ち上げられたのに。

深海 興味をもち始めたことは、とこと

ん極めてみたい性格なんですね。翌日には自宅近くの公民館で行われていた手話サークルの講習会に参加していました。世の中はちょうど第二次手話ブームで、手狭な公民館に五〇人ほどの方がぎっしりでした。

山岡 サークルの参加者はどういった方が多くいらしたのですか。

深海 ほとんどが社会人で、高校生の私は、純粹に手話という新しい表現形式を学びたいという気持ちで臨んでいましたが、皆さんは、職場や生活の中で手話でのコミュニケーションが必要な方ばかりでした。

山岡 実際に学ばれて、すぐに覚えられたのでしょうか。

深海 その講習会での環境がとても恵まれていて、何人もの聴覚障害者が手取り足取り教えてくださいました。さらに講習会が終わると、喫茶店でお茶を飲みながら手話によるフリートークをして、とても実践的なトレーニングになりました。

私自身も若かったですから、吸収も速かったですと思います。とにかく楽しくて楽しくて、毎日いろいろな地域のサークルに出向いて、講習を受けていました。そのお

かげで、県内の聴覚障害者とはみんな顔見知りになることができました。

山岡 その後間もなくして、手話に関する資格試験に合格されたんですね。

深海 周囲の方々から勧められて、「じゃあ受けてみようかな」と、本当に軽い気持ちで神奈川県県の「手話指導者」の資格試験を受けました。試験は高校三年生のときでしたから、手話を勉強し始めて半年余りでした。

山岡 試験はどういった内容なのでしょうか。

深海 話している内容を耳で聞き取って手話で表現したり、聾の方と手話で会話をしたり、与えられたテーマについて一分間自分の主張をするというのもありました。

山岡 「史上最年少」「最短期間」「その年の最高得点」の三冠を達成してのみごとな合格でいらっしました。

深海 合格したあとが大変でした。それまでは、自分の楽しみとして手話を学ぶことができていたのですが、合格したとたんに、周囲の聴覚障害者の私を見る目が変わったんです。自分たちの生活を支える手話

通訳者が生まれたという感じで。期待されることはうれしいのですが、その一方で重圧に苦しみました。

「小さな実験大学」和光大学への進学

山岡 どのような重圧をお感じだったのですか。

深海 当時の手話通訳者の倫理の中に、「聴覚障害者の命と権利を守る」という役割がありました。でも、ただか一八歳の人間ですから、他人の命と権利を守るなんて荷が重すぎます。それだけの覚悟をもつことが私にはできていなかったんです。

当時の私に必要なことは、もっと広い意味で障害者の世界を理解することでした。

しだいに聴覚障害者だけでなく、さまざまな障害のある方と交流を深めたいと思うようになっていたんです。そこで、和光大学への進学を真剣に考えるようになりました。

和光大学にはさまざまな障害者が大勢学んでいましたし、開学以来、「小さな実験大学」を旗印として、学生たちの主体性に任せて、やりたいことを存分にやらせる伝

統のある大学だったからです。そこに魅力を感じて、この大学であれば、自分の悩みを解決する道も探れるのではないかと考えました。

山岡 大学時代の経験は、手話通訳としてのキャリアの礎になっていらっしやるのでしょうか。

深海 大学は自分の基礎をつくってくれたところですし、その後の人格形成にもつながっています。実際に入学後には、それまで悩まされていたブレッシャーからも解放されました。

高校時代の手話サークルでは、周囲にいる人たちは自分よりも年齢が上の方ばかりでしたが、大学では同年代の学生と交流できたことも大きかったです。皆が同じような問題、悩みを抱えているので、私自身も悩みを吐き出しやすかったのです。

山岡 大学では、障害者との交流をどのように深められたのですか。

深海 和光大学では初年次教育の一つとして、「プロゼミ」というゼミ形式の科目があります。私が入ったゼミで、偶然、聴覚障害の学生と一緒にになったのです。その

学生と「障害者問題を考える会」という学内のサークルに入りました。そのサークルには視覚障害の学生もいたし、車椅子の学生もいました。

大切なことは目の前にいる人と いかにして「コミュニケーションをとるか

深海 そして、そこであることに気づいたんです。というのは、当初はさまざまな障害者と出会いたい、交流をもちたいと思っていたのですが、友達になってみると、障害のあるなしは決して関係がなく、大切なことはその人とのようにコミュニケーションをとるかというだけの話であるということです。コミュニケーションのとり方は、人によって変えればいいだけなんです。そういう発想の転換ができたことで大きな成長を遂げることができたと感じています。

山岡 ささまざまな障害のある学生と交流されることで、自分との間に壁はないということに気がつくたわけですね。

深海 さらに、和光大学ではすばらしい先生との出会いもありました。ドイツ文学者で千葉大学教授を務められた故小島純郎

先生です。先生はのちに「日本の盲ろう者福祉の父」と呼ばれるようになった方ですが、当時はまだ障害者との接点がなかった時期で、和光大学で非常勤講師としてドイツ語を教えていらつしやう、これもたまたまなのですが、私が聴覚障害をもつある学生と小島先生の講義を受けたのです。

語学はもともと苦手だった私ですが、当時は使命感に燃えていたので、聴覚障害の学生が同じ教室にいるのだから、私が手話通訳をしなければいけないという思い込みのもと、ドイツ語の授業でも必死に手話通訳をしていたんです。

しかし、手話通訳を続けるといのは、心身ともにとても疲れるんです。と同時に思考力も低下してしまうため、授業の内容は聞いていてもなかなか頭に残らない。始終手を動かしているからノートがとれないという状態だったんです。聴覚障害の学生も私の手元ばかり見ているから、メモしたり、教科書を見ることができない。結局、試験を受けたら二人ともみごとに赤点という結果でした。

すると先生は、毎週はじめに授業を受け

ているのにどうしたことかと驚かれたよう
で、ある日、先生から呼び出しを受けたん
です。先生はとても申し訳なさそうに、「私
の教え方が悪いのでしょうか」とおっしゃ
ったので、慌てて先生に事情をお話した
ところ、先生は何と「それなら僕が手話を
覚えます」とおっしゃってくださったんで
す。私たちの状況、奮闘ぶりは校内でも知
られていましたから、同情してくれる先生
はいいたものの、「自分が手話を覚える」と
おっしゃった先生はいなかったので驚きま
した。

山岡 すばらしい先生でいらしたのです
ね。

深海 早速、翌週の講義で、教科書の内
容を書いた大きな模造紙を黒板に貼りつけ
てくださり、その模造紙のおかげで私たち
は教科書を見なくても授業の内容を理解で
きるようになりました。さらに、先生は一
週間指文字を覚えられたんです。

山岡 指文字とはどういうものなのでし
ょうか。

深海 五十音を指で表現する形式です。
それによって、教科書の内容と、指文字の

深海 久美子さん



両方を同時に見ることができるようになりました。ただ残念なことに、先生は鏡を見ながら自己流で覚えられたものですから、手の向きがすべて逆で、聴覚障害者の学生も授業の内容をなかなか理解できていないようでした。授業が終わったあと、恐る恐る先生にそのことを話すと、先生は落胆しながら、「どうしましょうか」と言われたので、私から「先生、手話の講習会を学内で開きますから、みんなで覚えましょう」と提案しました。すると、先生は快く同意してくださいました。

それで、定期的に昼食を食べながらの三人だけのミニ講習会が始まりました。ただ、ガラス張りの部屋で行っていたので、

通りにかかる学生や職員の方々も興味をもち始めて、参加者がだんだんと増えていきました。そこで、「障害者問題を考える会」のメンバーたちの協力も得ながら、より本格的な講習会を開いたところ、参加者は何と五〇人まで増えたんです。

学生たちの活動によって生まれた「ノートテイク制度」

深海 さらに、参加した学生たちは、日頃から私たちがノートをとれずに苦労していたのを知っていたようで、「何か手伝うことがないか」といつも思っていたんだ」とも言ってくれたんです。

そのことがとてもうれしかったです。と同時に、どうしてこれまで周囲の人に助けを求めなかったのかと後悔もしました。でもこれをきっかけに和光大学の「ノートテイク制度」が生まれたんです。

山岡 「ノートテイク制度」は、和光大学に長年定着した支援制度とお聞きしています。耳が聞こえない学生の隣に健常の学生が座ってノートをとったり、パソコンでまとめたりする制度で、毎年五〇名ほどの

学生がノートテイクをしているようです。

深海 当時は「情報保障」という言葉が浸透し始めた時代で、障害のある人にも情報を提供する必要性が高まっていました。

他大学でもそうした気運が盛り上がりつついて、関東地方の聴覚障害の学生が連携して「関東聴覚障害学生懇談会」という組織も結成されました。私もその懇談会に入って、情報交換をしながら、障害学生が活動しやすい環境づくりについて必死に考えていました。プロの手話通訳者の派遣もお願いするなど、大学側とも積極的に交渉しました。

当時は、そのための費用を捻出することができないとの理由で採用されませんでした。が、今ではその制度も導入されています。

山岡 和光大学は障害学生への支援が非常に手厚いですね。ノートテイク制度や手話通訳制度だけでなく、映像教材文字起こし制度、対面朗読、教材テキストデータ化制度などもあります。その最初のきっかけが、深海さんをはじめとした当時の学生たちだったんですね。

大学卒業後は、手話通訳者としてのキャリアを本格的に積み重ねられました。

早くなりたかった 「耳年増」「目年増」

深海 手話通訳者として経験を積み重ねるうえで、重要なことは人生経験だということが徐々にわかるようになりました。もちろん手話の技術の向上も大切ですが、それだけではうまく通訳できないこともあるんです。

私が初めて正式に依頼された仕事は、子どもの認知裁判でした。まだ高校三年生のころで、しかも女子校に通っていたので異性との交流も乏しい。にもかかわらず、生々しい言葉が行き交って、私としては恥ずかしいし動転してしまつて、通訳どころでは



山岡 三子さん

ありませんでした。大学卒業後も、出産したこともないのに、出産の立ち会いに関する手話通訳をしたり、遺産相続や離婚訴訟の通訳を担当したり。つくづく、きちんと手話通訳をするためには、世の中を深く知ることが必要だからと、二〇代のときには、早く年をとりたい、目指せ！ 耳年増、目年増でした（笑）。

山岡 それだけ通訳には人生経験が必要だということですね。

深海 やはり体験しないとわからないことがたくさんありますからね。さらに、聴覚障害者の世界や状況を理解し、そのうえで、相手の立場に立つ姿勢も欠かせません。その点で、私は大失敗したことがあるんです。

山岡 どのような失敗だったのでしょうか。

深海 当時は、茅ヶ崎市福祉事務所の設置手話通訳という立場で、二週間に一度、ケースワーカーの方と、聴覚障害者で生活保護も受けていた独居のおばあちゃんの家庭訪問を行っていました。そのおばあちゃんは、耳が聞こえないだけでなく、目の病

気も患っていらつしやう。手話ができないので、うまく自分の思いを表現できないところがありましたから、これでは生活も大変だろうと、私たちは老人ホームでの生活を勧めたんです。しかし、おばあさんは、手話を使って「若い（人、いい）」としきりに伝えられるのです。しかし、私にはその意味がわかりませんでした。初めてその意味が理解できたのは、その後、おばあちゃんが亡くなられた後でした。

というのも、おばあちゃんの家には、必ず一日に一回、ご近所の方がお物業をもつて訪ねていらしていたらしいんです。さらに、おばあちゃんは手話サークルにも所属し、一週間に一度は、送り迎えつきでその集まりにも参加されていた。手話の勉強をしたあと、みんなでお弁当を持ち寄って昼食を楽しんでいたとも聞きました。さらに、週に二度はホームヘルパーが訪ねてくる。そして私たちも訪問する。決して寂しい環境ではなかったわけですね。

山岡 逆に老人ホームに入れば、皆さんとの関係性が断絶されてしまう。それで老人ホームに入ることを拒まれたんですね。

深海 そうだったのだと思います。おばあちゃんがおっしゃった「若い(人)」というのは私たちのことだったんです。それに気がつかなかった自分が情けなくて……。そのときに、もつと障害者に寄り添わなければいけないとの思いを新たにしました。

手話通訳士試験合格、そして

NHK「手話ニュース」キャスターへ

山岡 手話通訳者の公的資格として「手話通訳士」が認定されたのは平成元年のことですね。深海さんはその第一回の試験に合格されました。そして、平成二年からNHK「手話ニュース」キャスターとして出演されています。

深海 キャスターになったのは、試験に合格後、手話通訳士の会合でオーディションに誘われたのがきっかけです。以来、二〇年以上キャスターを務めています。

山岡 番組は生放送ですか。

深海 はい。

山岡 私はてっきり事前に録画した「擬似生放送」だと思っていました。生放送ゆえの苦勞もありなのではないでしょうか。

深海 突然、ニュースが差し替えられたこともありました。私たちはプロンプターと呼ばれるモニターを見ながら手話で表現するのですが、あるときそこに映し出された原稿の上に突然手が置かれたんです。「えっ」と思っていたら、急に差し替えの原稿が置かれ、これを伝えるようにと指令が下りました。

山岡 下読みなしの、初見の原稿ですか。

深海 ええ、初見です。心臓が口から飛び出るくらいびっくりしましたが、何とか乗り切りました。もつとひやひやしたのは、プロンプターが本番一〇秒前に壊れてしまい、何も映し出されなかったときですね。

山岡 それは一大事ですな。

深海 私は音声が開けるからニュースの音声を聞きながら表現することができですが、番組でベアを務める方は耳が聞こえないので、相方が手話で表現するときは、カメラに映らない角度で私が原稿を示していました。二〇分の番組で、半分はキャスターとして手話通訳、半分は裏方に回ったこともありました。

山岡 「手話ニュース」のキャスターを

される一方で、母校の和光大学の講師として教壇にも立たれています。学内を見渡して、当時と比べて何か変化はありますか。

深海 一番大きな変化は、障害学生に対する各種支援制度が定着したことです。誰もが勉強しやすい環境になりました。当時から見れば、隔世の感があります。

障害学生への支援制度は必要ですし、充実していることは素晴らしいことではあるのですが、そうした環境が「当たり前」になりすぎて、障害学生の姿勢が受け身になってしまっている面もあると感じています。

大学は、学生たちが試行錯誤したり、人間同士のぶつかり合いを経験する場でもあると思います。システム化が進んだことで、そうした経験がでなくなっている面があるのかもしれない。学生たちも、障害のタイプごとに固まってしまい、幅広く交流できていない。もう一步を踏み出す勇氣をもってもらいたいですね。

山岡 それは障害のあるなしは関係ないのかもしれない。私も大学で学生に接していますが、今は何をするにも「場づくり」が大事。ぶつかり合ったり、ディスカ

ッションするときに、まず私たちがその場をつくらないと、なかなか進みません。

深海 手話の授業でも、今の学生は他人と目を合わせることが苦手なようです。

手話では目を合わせないとコミュニケーションを始められないのですが、最初のうちはそれができません。さらに、今年度（平成二十五年）は難聴の学生が私の授業を受講しているのですが、当初は誰も積極的

にコミュニケーションをとろうとしませんでした。しかし、そんな学生たちも夏休みを過ぎたら変わるんです。

山岡 何が学生を変えるのでしょうか。

深海 耳栓をして一日行動することを夏休みの課題にしている、その課題に取り組むんです。そうすると、まず家族が話している内容が聞こえにくい。電話が鳴つても気がつかない。後ろからくる車の存在に気がつかない。コンビニで店員に何か話されても理解できず、思わずいらっとする。そういう経験をするので、「もう少し丁寧にコミュニケーションをとってみよう」と気づく契機になるわけです。

そのかいあって、後期になると難聴のそ

の学生の机の周りに、学生たちの輪ができました。とても大きな変化です。さらに、授業中も目を輝かせて、よりコミュニケーションをとろうと積極的にになり、授業自体もとても活性化します。

自分の位置を少しずらすことが「寄り添い」こと

山岡 今後はどのような活動に力を入れていきたいとお考えですか。

深海 教えることが大好きなので、学生たちに手話を教え続けたい。そして、後進を育てていきたいですね。ただ、今は「手話通訳士」の資格を取得しても、それを生業として活動できる素地が日本にはありません。生活できるだけの収入を得られないのです。その環境整備が今後の課題ですね。

同時に、私自身は障害者に寄り添う活動をこれからも続けていきたいと考えています。私は壇上で多くの人を前に手話通訳をするよりも、お一人ひとりの目をしっかりと見て、その方の状況や思いを理解しながら、コミュニケーションをとるのが性に合っています。また地域に戻って、聴覚障害の方

と共に活動していきたいです。

山岡 最後に学生の皆さんへのメッセージもお願いします。

深海 学生の皆さんには、ぜひ相手の立場に立つて考える想像力を磨いてもらいたいですね。自分が障害者だったらどう思うか、どうしてもらいたいか。それを基本に据えることが大切です。授業の中でも、学生たちは手話や指文字の表現を覚えると、すぐにその成果を試そうと、速く手を動かす傾向があります。確かに、手は上手に動かすのですが、それを他人が読み取るのは至難の業です。そのときには、「あなただつたら、そのスピードで読み取れますか」と質問すると、彼らははっと気づくんです。もつとゆつくり、丁寧にコミュニケーションをとらなければいけないって。

相手に寄り添うためには、自分の位置をずらしてみることも必要なことです。それがコミュニケーションの基本だと思います。

山岡 自分の位置をずらしながら、相手のことを慮る。そうした姿勢をみんなで見れば、この世の中、もつと生きやすくなりますね。ありがとうございました。